



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科における学生異動の実態：開設以来10年間の入学者の留年・休学・退学を中心に
Author(s)	上野, 武治; 深澤, 孝克; 真木, 誠 他
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 7, 61-71
Issue Date	1994-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37567
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_61-72.pdf



原 著

北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科 における学生異動の実態

——開設以来 10 年間の入学者の留年・休学・退学を中心に——

上野 武治・深澤 孝克・真木 誠・大宮司 信・末永 義圓
丸谷 隆明・村田 和香・河野 仁志・吉田 直樹・八田 達夫*

The Trend of Changes of the Occupational Therapy Students in College of Medical Technology, Hokkaido University

——Some Characteristics of the Repeaters, Absentees,
and Leavers in the First 10 Years——

Takeji Ueno, Yoshikatsu Fukazawa, Makoto Maki, Makoto Daiguji,
Yoshimaru Suenaga, Takaaki Marutani, Waka Murata, Hitoshi Kawano,
Naoki Yoshida and Tatsuo Hatta*

Abstract

The changes of the occupational therapy students in College of Medical Technology, Hokkaido University were studied with respects to repeaters, absentees and leavers for 10 years since the establishment, comparing with leavers in other departments of our college.

The percentage of all leavers in the college was 5.4 %, but the one of our department was 10 % and the highest in the 5 departments. Main two reasons of leaving our department were the change of course in the first grade, and the wrong career choice related to the failure of clinical practice in the third grade. In the case of the repeaters and absentees, the percentage was 14 % and had greatly decreased for the later half of the 10 years. That was considered to be partly attributed to improvements of the education and guidance.

It is very important to investigate actual condition of the changes of the students in order to improve and establish college education of the occupational therapy for the future.

要 旨

1981 年度の開設からの 10 年間に北海道大学
医療技術短期大学部作業療法学科に入学した学

生の留年や休学、退学の実態を調査し、併せて
その間の全学および他学科の退学とも比較しな
がら、これまでの当学科における教育活動の点
検を行った。

北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科

* 広島大学医学部保健学科作業療法学専攻

Department of Occupational Therapy, College of Medical Technology, Hokkaido University

* Department of Occupational Therapy, Institute of Health Sciences, Hiroshima University School of Medicine

全学の退学率は5.4%であるが、当学科では10%であり、特に男子においては15.4%と最も高率を示した。その主要な理由は1年次に最も多く見られる進路変更で、次いで3年次の実習の不調と関連する適性によるものであり、前半と後半の各5年間での差は少なかった。一方、留年と休学は合わせて14%で、後半の5年間では大きく減少していたが、これは入学する学生の作業療法士への理解の深まりや当学科における教育活動の改善によるものと考えられた。

学生異動の実態を詳細に検討することは、今後の作業療法教育の課題をより明確にする上でもきわめて重要である。

I. はじめに

1981年、作業療法学科（以下、当学科）が北海道大学医療技術短期大学部（以下、本学）に開設されて13年を経た。1992年より本学では教育研究活動に関する自己点検が開始され、将来のあり方に関する様々な模索が続けられているが、当学科では開設以降今日まで臨床実習を含め学科の教育活動に関して独自に検討を行って来た¹⁻⁸⁾。その中でも最も主要な問題は学生の異動に関することであったが^{3,5)}、これは当学科では退学が非常に多いことによるものである。1993年に10期生が卒業したが、これを機会にこれまでの当学科における教育活動を振り返り、今後のあり方を展望することを目的に、この10年間に入学した学生の異動の実態を検討したので報告する。

II. 対象と方法

対象は、1981年度から1990年度までに本学に入学し、退学した学生である。これらの学生に関して、1994年5月までの退学届に基づいて、学科別・入学年度別・男女別・退学学年別に検討した。当学科の学生に関しては、留年や休学も含めて検討したが、この場合には休学届に加えてこれまでの学科会議を通じて把握され

ている諸事実を資料とした。しかし、他学科の休学を含む留年者に関しては、学務掛や当該学科においても資料の整理がなされていないため検討しなかった。

III. 結 果

1. 本学の退学者の動向（表1，2）

本学各学科の開設より1990年度までの全入学者の退学率は5.2%であるが、学科別では作業療法（以下、作業）の10%を最高に、衛生検査技術（以下、衛生）5.4%、看護4.9%、診療放射線技術（以下、放射線）3.9%で、理学療法（以下、理学）は2.5%と最低であった（なお、衛生の開設は1982年度、放射線は1984年度）。男女別では全学で男子6.7%、女子4.6%と、男子は女子より1.5倍高く、特に作業では15.4%、衛生は10%と非常に高い値を示した。一方、女子も作業の7.4%を最高に、看護4.9%、衛生4.1%と続いていた。入学年度では全学、各学科とも特定の傾向は認められなかった。

学年別の割合では、全学で1年次が53.7%と過半数を占め、次いで2年次26.3%、3年次20%であった。しかし、各学科では大きな相違があり、理学や衛生、放射線では1年次が大部分を占め、2年次は少なく、3年次にはいない。しかし、看護では1年次よりむしろ2～3年次に増加の傾向があり、作業では1年次が過半数を占め、次いで3年次に多い傾向を示した。各学年の退学率も同様の傾向にあるが、特に作業1年の5.5%、衛生1年の4.7%、作業3年の3.2%などが高率であった。

2. 当学科の学生異動に関する検討

1) 学生の全体像（表3，4）

10年間の入学総数は200名であり、男女別では各年度で多少の差があるものの、男子65名（32.5%）、女子135名（67.5%）と、1対2であった。入学時の平均年齢は19.6歳で、男子20.6歳、女子19.3歳と男子が女子より1歳上であった。出身高校別では道内出身177名（88.5%）と、道外出身23名（11.5%）であった。

表1 本学退学者の学科別・入学年度別・男女別動向（1981年～1990年度）

学 科 名	性 別	入 学 年 度												入学者 総 数	退学率 (%)
		81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	合計			
看 護	男	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	
	女	5	8	2	3	7	2	5	5	1	1	39	793	4.9	
	計	5	8	2	3	7	2	5	5	1	1	39	799	4.9	
理学療法	男	0	2	0	1	0	0	0	0	1	0	4	119	3.4	
	女	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	81	1.2	
	計	0	2	0	1	0	0	0	1	1	0	5	200	2.5	
作業療法	男	1	2	0	1	1	2	2	0	0	1	10	65	15.4	
	女	0	2	3	1	0	0	3	1	0	0	10	135	7.4	
	計	1	4	3	2	1	2	5	1	0	1	20	200	10	
衛生技術	男		2	1	0	1	0	1	1	2	1	9	90	10	
	女		0	1	0	0	1	2	2	3	2	11	270	4.1	
	計		2	2	0	1	1	3	3	5	3	20	360	5.4	
診療放射線技術	男				1	1	3	1	1	2	2	11	226	4.9	
	女				0	0	0	0	0	0	0	0	54	0	
	計				1	1	3	1	1	2	2	11	280	3.9	
合 計	男	1	6	1	3	3	5	4	2	5	4	34	506	6.7	
	女	5	10	6	4	7	3	10	9	4	3	61	1333	4.6	
	計	6	16	7	7	10	8	14	11	9	7	95	1839	5.2	

* 衛生技術学科は82年度開設、診療放射線技術学科は84年度

表3 作業療法学科入学者の年度別・男女別・出身別動向（入学者総数 200 名）

性別	入 学 年 度										合計	全入学者に占める割合(%)
	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90		
男	7(1)	5	7	9(1)	6(1)	8	9(1)	4(2)	3(1)	7	65(7)	32.5
女	13(3)	15(2)	13(5)	11(2)	14(1)	12	11(2)	16	17	13(1)	135(16)	67.5
道外者	4	2	5	3	2	0	3	2	1	1	23	11.5

() : 道外出身者 道内出身者 117名 (88.5%)、道外出身 23 名(11.5%)

入学時平均年齢：全体 19.7歳 (SD 3.15) 男 20.6歳 (SD 3.21) 女 19.3歳 (SD 3.03)

表4 作業療法学科の異動学生の年次別・学年別推移

異動内容	学年	入 学 年 度												合計 (名)	割合 (%)
		81	82	83	84	85	幅(%)	86	87	88	89	90	幅(%)		
留年	1	1	2	0	2	0	5	0	0	0	0	1	1	6	30
	2	2	4	2	1	1	10	0	0	1	0	2	3	13	65
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	5
	小計	3	6	2	3	1	15(75)	0	0	1	1	3	5(25)	20	100
休学	1	1	1	0	1	0	3	0	2	0	0	0	2	5	36
	2	0	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	2	3	21
	3	0	1	1	0	3	5	0	0	0	0	1	1	6	42
	小計	1	2	1	2	3	9(64)	0	4	0	0	1	5(36)	14	100
退学	1	0	3	2	1	0	6	2	2	1	0	0	5	11	55
	2	0	0												

表5 作業療法学科の留年者（休学を除く）の動向

学生 No.	性 別	入学 年齢	留年の学年	留年の直接理由	転機	備 考
1	男	23	1、2、2	学業不振	退学	大学中退
2	男	22	1	学業不振	退学	札幌専修学校中退
3	女	19	1	授業欠席	退学	
4	女	19	2	学業不振	卒業	
*5	女	18	2	学業不振	卒業	
6	男	19	2、2	授業欠席	卒業	宗教的活動への専念
7	男	21	2	学業不振	卒業	
*8	女	35	2	出産・授業欠席	卒業	大学卒
9	男	18	1	授業欠席	卒業	
10	男	23	1	授業欠席	退学	大学卒、志向の相違
11	男	20	2	授業欠席	卒業	
12	女	19	2	学業不振	卒業	
13	男	18	2	学業不振	卒業	
14	男	22	3	学業不振	卒業	他短大PT学科中退
15	男	18	2	学業不振	卒業	
16	男	19	1、2	授業欠席	在学中	3年次臨床実習中

男11名、女5名 * 道外出身者 入学時平均年齢：20.8歳（SD 4.05） 男：平均20.3歳（SD 1.86）
女：平均22.0歳（SD 6.51）

らの者の退学は4名で全体の1/4にすぎなかった。

3) 休学者の動向（表4, 6, 7）

休学は12名で、全入学者の6%に相当する。男女別では男子5名、女子7名であるが、男女別入学者への割合は7.7%、5.2%で、男子でやや高い。平均年齢では22.3歳と高いが、これは28歳1名と30代2名が加わっているためである。出身別には道内出身者は9名で5.1%、道外出身者は3名で13.0%と、道外が道内より2.5倍高い。

休学2回以上の者は2名で、延べ14名である。これを開学5年で区切ると前半9名（64.3%）、後半5名（35.7%）で、やはり前半に2/3が集中し、後半で減少していた。学年別では1年次5名、2年次3名、3年次6名で、留年とは異なりむしろ3年次に多くなる傾向にあった。休学期間は6～21ヶ月であるが、「病気」による長期の者2名を除くと全員が1年以内であった。

休学事由では、「病気」3名、「出産・育児」2名、「心身の疲労」2名、「経済的理由」2名、「一身上の都合」3名であった。「心身の疲労」のNo.8は、入学早々の怪我で病欠し、勉強が大幅に遅れての焦りによる。No.3, 6, 12は3年次臨床実習を契機に精神的不調に陥ったり、作業療法士としての進路に迷いを生じての休学である。No.11は「経済的理由」としながら実際は再受験の準備であったことが後に判明している。No.9は入学当初から意思不明のまま授業を欠席し、アルバイトで自活していたが、本人の就学意志を確認して休学を許可したものである。休学にいたる理由と学年、期間の関係は表7にまとめたが、学年の進行と共に本人の適性と関係する進路上の問題が、実習困難や精神的不調と複雑に結び付いて表面化して来ようである。

転機では、卒業4名（33%）に対して退学8名（67%）と2/3が退学しているが、その多くが

表6 作業療法学科の休学者の動向

学生 No.	性 別	入学 年齢	休学 学年	休学期間 (月)	休学届事由	休学に至る背景	転機	備 考
*1	女	19	1	4	病気	喘息の悪化	卒業	
2	女	19	1	11	一身上	進路の模索	退学	留年No.3
3	女	18	3	9	精神疲労	実習中の精神的不調	退学	
*4	女	18	3	21	病気	腎疾患に罹患	退学	
5	女	28	1,2	6、6	出産・育児		卒業	大学卒業
6	男	20	3,3	10,18	病気	実習中の精神的不調	退学	
7	女	30	3	6	出産・育児		卒業	大学卒業
8	女	33	1	6	心身の疲労	勉学の遅れによる不調	退学	大学卒業
9	男	19	1	9	経済的理由	当学科での就学決意	卒業	
10	男	20	2	5	一身上	進路の模索	退学	
*11	男	25	2	12	経済的理由	実際は再受験の準備	退学	
12	男	18	3	9	一身上	実習の不調と自信喪失	退学	

男5名・女7名 * 道外出身者 入学時平均年齢：22.3歳 (SD 5.10) 男：平均20.4歳 (SD 2.42)

女：平均23.6歳 (SD 6.02)

表7 作業療法学科休学学生の理由・背景、学年、期間

理由	学年・期間			休学の学年			休学の期間 (%)			合計 (%)	備 考
	1	2	3	1	2	3	～6月	～1年	～2年		
休学者数 (名)	5	3	6	6	42.9	6	42.9	6	14.3	14 (100)	延べ人数
休学の理由											該当する事例
a 心身の健康問題	2		4	2		2		2		6 (42.9)	No. 1, 3, 4, 6, 8
b 出産・育児	1	1	1	3						3 (21.4)	No. 5, 7
c 進路上的問題	1	2		1		2				3 (21.4)	No. 2, 10, 11
d 臨床実習の不調			1			1		1		1 (7.1)	No. 12
e 経済的理由	1					1				1 (7.1)	No. 9

*No. 12 はcにも関連す。

で休学した者である。

表 8 作業療法学科の退学者の動向

学生 No.	性 別	入学 年齢	退学 学年	在籍期間	退学届事由	退学に至る背景	学科内の 検討期間	備 考
1	男	23	3	5年6月	一身上	適性欠如と実習中断	5年6月	留年No.1
2	男	19	1	6月	再受験		6月	
3	男	22	1	2年	一身上	学業不振・適性欠如	2年	留年No.2、
4	女	19	1	2年	進路変更		1年6月	留年No.3、休学No.2
5	女	18	3	3年3月	一身上	実習不調と自信喪失	2年	休学No.3
6	女	18	1	2月	他大学受験		2月	
*7	女	19	1	6月	方向の違い		3月	
*8	女	18	3	4年	病気	病気回復の遅れ		休学No.4
9	女	18	1	1年	転学		7月	
10	男	23	2	2年10月	就職	福祉系へ転職	9月	留年No.10
11	男	20	3	6年	一身上	病気による実習中断	3年10月	休学No.6
12	男	20	1	3月	大学受験		3月	
13	男	19	1	1年	進路変更		1年	
14	女	33	1	1月	一身上	精神的な不調	1月	大学卒
*15	女	18	1	1年	勤労・不登校	進路変更	6月	
16	男	20	2	2年	一身上	進路変更	1年3月	休学No.10
*17	男	25	2	2年	経済的理由	再受験	1年3月	休学No.11
18	女	33	3	4年	一身上	適性欠如と実習中断	8月	休学No.8
*19	女	20	1	1月	再受験		0.5月	
20	男	18	3	3年	一身上	実習不調と進路変更	8月	休学No.12

男10名、女10名 * 道外出身者 入学時平均年齢：20.7歳 (SD 3.50) 男：平均20.9歳 (SD 2.12)

女：平均20.4歳 (SD 4.45)

表 9 作業療法学科退学学生理由・背景、学年、在籍期間

理 由	学年・期間		在 籍 の 期 間 (%)					合計 (%)	備 考
	1	2	3	～6月	～1年	～2年	～3年	3年～	
退学者数 (名)	1	1	3	6 (30)	3 (15)	4 (20)	2 (10)	5 (25)	20 (100)
退学の理由									該当する事例
a 進路変更	9	3		5	3				

事例 No.1：1 年次には予備校にも通っていたようで、当初から入学動機に疑問が持たれていた。また、クラス内での交流もほとんどなく、奇異な行動も見られ、成績も不良で3 回の留年を繰り返すなど、明らかに医療者として不適格と判断されていた。本人は学業継続の意思を示していたが、3 年次の実習は指導者側の判断で早々に中止となったため、それ以後の実習は無理と判断して退学を勧めた。学科では学業継続の意思を示す本人への指導をめぐって議論が続けられたが、結局は実習中断を経過して退学したものである。

事例 No.11：1 年次から精神的緊張が強く、クラス内での安定した人間関係が作れないまま3 年次に進級。しかし、実習開始早々に心身症的症状を呈して休学し、翌年実習を再開するも再び中断となる。その後は1 年半休学し、社会性の訓練も兼ねてアルバイトを行っていたが、3 回目の実習もやはり達成出来ず、本人の適性も考慮して退学を勧めた。本例は直接は精神的不調による実習中断であるが、適性の問題も深く関与していた。No. 18 も同様に実習を危惧されていたが、実習中に精神的に不調となり、かつ実習生として適格性に欠ける行動も出現して実習中止となり、退学に至った。

事例 No. 20：1～2 年次の成績も良く、クラス内での人間関係にも特に問題もなく3 年に進級した。しかし、実習が思いの外順調に進まず自信を失い、進路変更のための退学を希望し、実習を無断で中断している。学科としては休学の上で熟慮を求めたものの、結局は退学に至った。実習指導のあり方や学生の職業志向や社会的成熟性などを考えさせられた事例である。

VI. 考 察

1. 本学退学者の背景と今後の課題

今回の調査で、本学開設から1990 年度までの入学者の退学率は全学で5.2%で、男子学生では女子学生よりもはるかに高く、学科別では当

学科が10%と最も高率なこと、退学学年では看護、作業と他の3 学科との間にはそれぞれ特徴が見られることが明らかにされた。本調査では他学科の退学理由を検討してはいないため、それらの背景を明らかにすることは出来ないが、この点は本学一般教育等の三浦が詳しく報告している⁹⁾。三浦は本学開設から1992 年度入学者までの退学理由に関して、当学科を含む各学科教官の感想を参考に検討しているが⁹⁾、それによると退学者の約半数は留年や休学を経験しており、それらはある種の危険信号であること、退学理由の50%が進路変更であり、特に衛生や理学、作業では主たる理由となっており、そのほとんどが1 年以内に決断していること、看護の退学は進路変更(24.4%)や学業不振(26.8%)、進路選択不適切(4.9%)、不明(26.8%)など幾つかの理由に分かれるが、学年の進行による実習場面での対人関係によるものが大きく、当学科もこのような傾向にあること、であった。一方、看護学科での開設5 年間の学生異動に関する報告では¹⁰⁾、退学は17 名(4.3%)で今回の調査よりは低率であるものの、退学の理由(複数回答あり、計23 名)は実習中のトラブルや教師との関係などの「教育環境」(47%)が最も多く、次いで「進路選択不適切」(35%)、「問題解決行動の未熟さ」(29%)などであることが注目される。三浦の報告とは内容的に異なるが、これは基本的には視点の相違によるものであろう。

以上、本学の退学は全体として男子学生に、しかも進路変更の理由が多いことが特徴であるが、この背景には本学が養成する医療技術者の置かれている社会的状況や本学の特殊な状況が関与しているものと思われる。それは、まず本学の目的や特徴を十分に理解しないまま受験し、入学して来る者が少なくないことである。これは医療職としての歴史が古く、また社会的にも広く認知されている看護や理学、あるいは放射線の各学科では総じて退学者が少ないこと

にも示されている。第2に、男子学生では大学志向の者が多いこともあって、本学のような短大に満足出来ない者が少なくないことである。近年のように大学進学率が上昇し、医療職種の大学教育が進展するにつれて、本学の魅力や役割があらためて問われるが、こうした問題の解決は本学の本質的かつ将来的課題といえよう。

2. 当学科の学生異動の背景

当学科における学生異動は、留年と休学は合わせて14%であり、特に退学は10%と非常に高い率を示していた。この点に関して、全国作業療法士養成校（短大13、専修学校20）の休学を含む留年と退学に関する報告を検討すると¹¹⁾、1986年から1989年までの4年間の全在籍者のうち留年は8.9%で、男子13.1%、女子7.0%と男が女の約2倍で、学年別では2年次に次いで3～4年次で高率であった。また、退学は2.5%で、男子3.5%、女子2.1%とやはり男子に高い傾向があり、学年別では全学年に亘る傾向が報告されていた。これらの結果との単純な比較は必ずしも適切ではないが、当学科では全国に比しても留年や退学が著しく高い率を示している。なお、当学科の上記4年間の入学者に限ってみても、休学を含む留年は7.5%（6名）で全国平均以下であるが、退学は10%（8名）であり、当学科の退学率が著しく高いことはやはり確かである。

本学一般教育等の和氣が本学開設2・3年目に行った学生の入学動機に関する調査では¹²⁾、看護と当学科学生の回答の比率は「医療への関心」が84～86.1%対56.5～60%、「将来の資格取得」が92.4～93.3%対60.7～70.7%である一方、「あまり理由なし」・「その他（高校の先生に言われて、滑り止めとして、北大だから）」が2.5～6.3%対21～30.3%であった。このように当時の看護と当学科の学生では入学動機に大きな相違が見られたが、これは少なくともその後の勉学意欲にも大きく影響するものである。また、1981年から1987年の7年間の当学科入学者に

対する調査では^{1,2)}、大学の併願受験や併願合格が多く、作業療法士を志望して他の養成校を受験した者は2割程度と少ないこと、当学科への入学動機も「将来性がある、就職に有利、地元である、学費が安い、北大・国立大だから」などと多様で、作業療法士への志望には弱さがあることが指摘されていた。このように当学科の入学者は、職業志向の比較的明瞭な専修学校入学者とはかなり様相の異なるものと思われるし、道外出身者に高い休学や退学の比率も「北大だから」などの漠然とした入学動機に多分に関連する可能性を示唆するものである。さらに、1988年在学の当学科学生へのVPI職業興味検査による職業興味と心理傾向の検討では⁴⁾、機械関係の技術者への志向を示す「現実的職業領域」や研究・調査などへの志向である「研究的職業領域」に興味が強くなり、心理的には積極的に仕事や活動に幅広い関心を持つ「黙従反応傾向」を示していた。しかし、作業療法士に必要とされる対人接触技能に深く関係する「社会的職業領域」や企画・組織力などを反映する「企業的職業領域」を示すタイプが少ないこと、さらに成績不振の問題学生では上記に加えて、対人的仕事をあまり好まず、社会一般の価値観とは異なった傾向を示す「稀有反応傾向」が強く見られていた。

以上の調査結果は、当学科には適切な職業選択と強い職業志向を持って入学する学生は多くはなく、さらに作業療法士に必要とされる心理傾向とは明らかに相反する要素を持つ者もいることを示していた。後者の学生においては、患者に直面する臨床実習へと学習が進展するに伴い、主観的にも客観的にも職業適性上の問題がより尖鋭化してくることになる。2～3年次に休学し、退学に至った学生は基本的にはこうした矛盾を内包していたものである。

道内ではその後、札幌医大衛生短大に作業療法学科が開設され、社会一般の認識も深まり、学生の職業選択も徐々に適切なものに変化して

いるものと期待される。しかし、その一方で、学生の入学動機や志向性の明確化と職業興味・心理傾向、さらには臨床実習などで求められる適性や問題解決能力とは必ずしも相関するものではないことも念頭におく必要がある。作業療法士の養成が1930年に開始された英国でも¹³⁾、1967年から1974年にかけての全養成校の退学率は23%と非常に高く、1975年から1983年にかけては14%にまで減少したものの、その理由には「成績不良」41%に続いて、「職業選択の誤り」が29%もあることが報告されている¹⁴⁾。このように入学する動機が明確であっても、「進路選択の不適切」の退学が決して少ない問題は、看護教育に長い歴史を有する本学看護学科においても同様である^{9,10,12)}。したがって、医療職種 of 養成校に入学する学生においては、動機・志望と必要とされる職業適性が合致しないことによる問題は今後も生じ得るものである。また、今日の長く厳しい受験生活を反映して、対人的社会性においてある種の偏りや未熟性を有する者の入学も避けられないが、こうした問題は基本的には実習を含めた教育の質的向上と人格発達の視点に基づいた指導によって解決が計られるべきものであろう。

3. 当学科の教育活動と今後の課題

当学科学生の異動は開設10年間の後半5年で大きく減少していたが、これは入学する学生の動機はもちろん、当学科における教育や学生指導の改善もある程度反映していると考えられるので、以下に若干検討して見たい。

それは第1に、1学次への専門科目の授業導入が挙げられる。まず、カリキュラムの再検討により、1983年度より1年後期に「作業療法原理」と「臨床見学実習」が実施された。続いて、1988年度には「技術学実習」も加わり、作業活動種目の学習が開始された。1990年度より1年前期には「リハビリテーション概論」と「作業療法概論」が開始され、病院や施設の見学も実施された。このように入学早々から職業像が明

確化出来るように専門科目を導入することの意味は当学科の場合にはきわめて大きい。

学生指導に関しても、1984年度より副担任が、1986年度には一般教育等教官に当学科との連絡委員（副担任）が置かれ、一般教育等教官と理学・作業両学科教官との連絡会議も開催され、学生の問題を中心に意見の交換がなされた。この会議はその後年1回定例化されているが、こうして様々な問題を抱えている学生に対し早期からの指導が可能となった。

3年次の臨床実習に関しては、問題はむしろ学生によって提起されたが¹⁵⁾、当学科においても学生と臨床指導者に対する調査によってその概略を把握することが出来た⁷⁾。それによると、実習中にかなり高頻度の学生が自信を失うなど深刻な心理的体験を有していること、臨床指導者も全体として若く経験に乏しいために、学生への指導や対応に苦慮していること、臨床指導のあり方はもとより、学校での授業と実習との関連性にも種々改善すべき点が少なくないことなどが明らかにされた。また、臨床実習の大部分を学外の一般病院に委託し、医学部附属病院での実習が極端に少ない現状は種々の問題を生じさせる背景となっているが、こうした状態の改善に向けての全国調査も実施された⁸⁾。この点は文部省の抜本的対策が必要である。

入学者選抜方法に関しても、当学科ではこれまで全国調査も行いながら、社会人特別選抜を含めて改善方法の検討を行ってきた⁸⁾。具体的には本学の将来的動向を考慮して決められるが、いずれにしても明確な動機と十分な適性を兼ね備えた学生を受入れることが重要であり、選抜方法の検討は今後も継続してなされるべき課題である。

わが国では作業療法士が誕生して30年の歴史を有するが、短大教育は開始されて十余にすぎない。したがって、今後の作業療法教育の課題を明らかに上でも、この間の教育活動を種々の面から点検・総括することはきわめて意

味のあることである。

V. ま と め

本学開設から1990年度まで10年間の当学科入学者の異動実態を調査し、他学科の退学とも比較・検討を行い、以下の結果を得た。

1. 1990年度までの本学入学者の退学率は全学で5.2%であった。学科別では当学科が10%で、特に男子は15.4%と最も高率を示した。学年別では衛生、理学、放射線の3学科では大部分が1年次に退学し、3年次には見られないが、看護では2～3年次、作業では1年次と3年次に多くなる傾向にあった。

2. 当学科における留年、休学、退学を合わせての延べ異動数は54名(27%)であった。留年は学業不振を理由に2年次に最も多いが、休学はむしろ実習に関連して3年次に多くなる傾向にあり、その多くが退学していた。

進路変更を理由に退学する者は6割を占め、入学1～2年以内に退学していた。一方、適性や心身の健康問題による退学は3年次の臨床実習と関連する傾向にあった。

3. 開設10年間の後半5年での異動数の減少には、学生の入学動機がより適切化していることや、当学科における教育や学生指導の改善が関与していると考えられた。

なお、本論文の脱稿後、表5の学生No.16は進路変更を理由に退学している。

文 献

- 1) 山田 孝, 丸谷隆明, 末永義圓, 他: 作業療法はどう見られているか—道内高校進路指導教諭と在学生へのアンケートから—, 作業療法, 2(2): 9-15, 1983.
- 2) 真木 誠, 山田 孝: 作業療法はどのように見られているか? (4)～在学生へのアンケートから～(7年間の変化について), 作業療法, 7(2): 539-540, 1988.
- 3) 北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科討議資料: 作業療法学科における学生の異動について(その1: 退学者), 1988.
- 4) 村田和香, 山田 孝: 短期大学における作業療法教育と学生の職業選択における問題点—VPI職業興味検査を用いて—, 作業療法, 8(5): 700-707, 1989.
- 5) 深沢孝克, 大宮司 信: 作業療法学科における退学者について, 10周年記念誌, 57-59, 1992, 北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科, 札幌.
- 6) 大宮司 信, 丸谷隆明, 末永義圓, 他: 作業療法学科における入学者選抜方法の現状と課題—全国国立医療技術短期大学部作業療法学科へのアンケート調査から—, 北海道大学医療技術短期大学部紀要, 6: 43-54, 1993.
- 7) 河野仁志, 村田和香, 真木 誠, 他: 臨床実習教育上の問題点のありかの検討, 北海道大学医療技術短期大学部紀要, 6: 55-69, 1993.
- 8) 上野武治編: 医学部附属病院における理学療法学科・作業療法学科学生の臨床実習の改善・充実のための調査研究(1993年度教育方法等改善研究経費研究成果報告書), 1994, 北海道大学医療技術短期大学部, 札幌.
- 9) 三浦敏明: 学生の進路変更の状況について, 1992, 第16回国立大学医療技術短期大学部一般教育協議会総会討議資料, 徳島.
- 10) 石塚百合子, 伊東和子, 荻野薫子, 他: 学生異動の実態, 北大医短大部看護学科年報, 2: 26-30, 1986.
- 11) 日本作業療法士協会: 作業療法白書1990, 作業療法, 10(特別1): 120-122, 1991.
- 12) 和氣和民: なぜ医療技術短大を志望したか?, 1986, 第1回北海道大学医療技術短期大学部一般教育等・理学療法学科・作業療法学科教官連絡会議討議資料, 札幌.
- 13) 佐藤 剛: 4年制作業療法教育の国際比較, OTジャーナル, 27(3): 181-186, 1993.
- 14) C. F. Paterson: Annual survey of occupational therapy students: reasons for drop-out, Br. J. Occup. Ther., 51(3): 81-83, 1988.
- 15) 中島 彩, 森林史子: 臨床実習において作業療法学科学生が直面した種々のトラブルと問題解決に関する調査研究, 北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科卒業研究論文集, 5: 64-74, 1991.